To use our Spirit, time,
knowledge and skills
"TO BE OF USE
not only to ourselves
but to others as well"
Pipat Chaisurin

聖学院中学校・高等学校

他者のために、社会のために。聖学院スピリットを胸に「Change Mind」の奇跡に触れる

Tokyo
•
Seigakuin
Junior & Senior
High School

聖学院中学校・高等学校には 29 年続く海外研修がある。
タイ北部の山岳地帯の少数民族の児童保護施設に宿泊しながら、
地域再生に向けたさまざまな活動に取り組むというプログラムだ。
遠い異国の辺境で、貧しいながらも屈託のない明るい笑顔の子供たち出会い、
生徒一人ひとりが、自分を見つめ、心に問い掛ける。
村人たちのために、地域のために「自分は何ができるのか」と。
そこに、「Only One for Others」を理念とする同校の男子教育の真髄がある。

伝統のタイ研修で自然と輝く聖学院生の隣人愛

タイ最北部、チェンライ県にある『メーコックファーム』は、「Change Mind が起きる奇跡の場所」と呼ばれている。

ミャンマー、ラオスと国境を接し、ゴールデントライアングルと呼ばれるこの一帯では、かつて山岳少数民族の村々に麻薬汚染が広がりコミュニティは崩壊、人々は貧困に陥り、子供たちは劣悪な環境下での生活を余儀なくされていた。しかし、それから四半世紀。緑豊かな美しい風景を取り戻しつつあるコック川沿いの施設では、かつての傷跡を引きずる子供たちを保護し、生活支援と教育活動が続けられ、村人たちの心の中にも未来への希望が甦ってきた。

聖学院中学校・高等学校の生徒たちが初めて同地を訪れたのは 29 年前。以来、タイ研修の名のもとで、少数民族の児童保護施設住に宿泊しながらボランティア活動や子供たちとの交流を行うなど、地域再生に向けた支援を続けている。

例年、生徒たちを引率をしている伊藤豊教諭はこう話す。

「決して恵まれているとは言えない環境下の子供たちと出会っても、生徒たちは彼らを卑下して『かわいそう』と思うことなく、同じ目線で接し、対等の人間としてリスペクトをしながら溶け込んでいきます。それを自然とできるのは、素敵なことだと思います。それこそが、本校が大切にしている“心”なんです」

Only One for Others という理念の下に育つ精神

昨年で創立 111 年を迎えた聖学院は、一貫してキリスト教精神に根ざした“唯一無二の人間教育”を実践してきた。「男子教育の中でこそ育つものがある」と確信し、揺るぎない「父性」を育成しながら社会の力強い担い手としての自覚を養っているのだ。そして、その根底には同校の理念「Only One for Others（他者のために生きる個人）」が流れ、生徒にも教員にも、その心が自然と芽生える環境がある。

高 1 の森上雄介君が、苦笑いを浮かべながら宿題にまつわるエピソードを教えてくれた。

「僕は小学校の時になかなか宿題を出せずにいて、50 個ほど溜めてしまっていました。でもここでは、先生が集まって宿題を見てくれる機会があって、最後までずっと付き添ってくれるんです。面倒見がいい学校だなと感じます」

森上君は、「優しく温かい雰囲気」に惹かれて同校に入学。その精神を感じながら日々の学校生活を過ごし、昨年は初めてタイ研修に参加した。

「海外は初めてだったので、新しい発見や初めて知ることが多く、すごく面白い毎日でした。特に思い出深いのは現地で日本食を振る舞ったことです。串揚げとカレーライスを作って現地の人たちに食べてもらいましたが、僕たちがいつも食べている日本食が他の国でも受け入れられたのが嬉しかった」と笑顔を見せる。

もちろん、彼にとってのタイ研修は、それだけでは終わらない。麻薬汚染の傷跡が未だ残るタイ北部の現実を目の当たりにしたことで、現地が抱える問題を自身の中で消化、分析し、帰国後には「教育と麻薬と換金作物」と題するレポートにまとめ上げ、その解決策をしっかりと提案している。

現地の人たちに日本食を食べてもらいたい！自慢（？）の腕を振るって串揚げを揚げる森上君

中 3 から毎年参加し続けている佐藤君。現地にも慣れ親しみ、いつも明るい笑顔を見せる

生徒たちが作った日本食を食べてみようと大勢の子供が集まった

コーヒー農園での収穫作業は早朝からスタート。籠を背負い、無心で実を摘んでいく

「自分に与えられた役割」を自問自答し、未来を拓く

「最初は言葉がなかなか通じませんでした。でも、次第にどんどん話せるようになり、最終日には兄弟のような関係になれるんです。その変化が嬉しくて、また行きたいと思うんです」

そう話すのは高 3 の佐藤聡平君。中 3 の時からタイ研修に毎年参加し続けてきた。

「コーヒー農園でコーヒーの実の収穫の手伝いや、洪水対策のために橋を架ける骨組み作りの手伝いをしたこともあります」

タイ研修では、生きるための“命のコーヒー豆”を収穫したり、土木作業で重い石や土を運ぶなどのハードワークも体験する。そうした作業を現地の人たちと共にすることで、心が通い、絆が芽生えることを実感したと言う。

現地では、環境も生活習慣も文化も、そして言葉も日本とはまったく異なる。だが、そこで現地の人々と寝食を共にしながら過ごすことで、違いに対する“壁”を乗り越えていく。

「タイに行って“言葉の壁”の本当の意味を学びました。言葉が完璧じゃなくてもジェスチャーなどを交えれば伝えたいことは伝わるし、相手が何を言いたいのかも分かります。自分が考えていた“言葉の壁”は、自分自身で生み出したもの。本当は、壁はないんだと思います。それを感じてからはコミュニケーション力が上がり、英語で話すことの意欲も上がりました。タイでの経験をもとに、いつか海外で日本語を教える教師になりたいと思っています」と、佐藤君は目を輝かせる。違いを乗り越えたことで、未来への道が拓けたようだ。

写真上：日本から持ち込んだ古着をフリーマーケットで販売し、収益金を「メーコッコファーム」の子供たちの教育資金に充てる
写真下：少数民族の子供たちとすっかり仲良し。厳しい環境の中でも挫けることなく、明るく元気な子供たちとの交流を通して、生徒たちも大きく成長する

厳しい環境の中でも力強く生きていく屈託のないタイ北部の子供たちの笑顔に接し、「本当の豊かさとは何か」「自分に与えられている役割は何か」と自問自答する。同校が大切にしてきた「他者を思う気持ち」は、自分の心としっかりと向き合うことで、育まれていくものなのだろう。そして、その経験が生徒たちの成長に与える影響は計り知れないものがある。だからこそ、同校はタイの辺境へと足を運ぶ。